

ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン 予防接種説明書

<子宮頸がんの予防>

ヒトパピローマウイルス（HPV）感染症とは？

ヒトパピローマウイルス（HPV）は、人にとって特殊なウイルスではなく、多くのヒトが感染しそしてその一部が子宮頸がん等を発症します。

100種類以上の遺伝子型があるHPVの中で、子宮頸がんの約50～70%は、HPV16、18型感染が原因とされています。HPVに感染しても、多くの場合ウイルスは自然に検出されなくなりますが、一部が数年～十数年かけて前がん病変の状態を経て子宮頸がんを発症します。

子宮頸がんは国内では年間10,000人が発症し、年間約2,700人が死亡すると推定されています。ワクチンでHPV感染を防ぐとともに、子宮頸がん検診によって前がん病変を早期に発見し早期に治療する事で子宮頸がんの発症や死亡の減少が期待できます。

接種について

現在国内で接種できる子宮頸がん予防ワクチンは、国内外で子宮頸がん患者から最も多く検出されるHPV16型及び18型に対する抗原を含んでいる2価ワクチン（サーバリックス）と他の病気の原因ともなる6型、11型もくわえられた4価ワクチン（ガーダシル）があります。

それぞれのワクチンは、接種間隔が違うほか、両方を接種した場合の安全性、免疫原性、有効性に関するデータはないことから、同一のお子さんには、同一のワクチンを使用します。

（例えば2価のワクチンを接種した場合、4価のワクチンを接種する事はできません）

接種対象者	12歳となる日の属する年度の初日から16歳となる日の属する年度の末日までの間にある女子		
標準的な接種期間	13歳となる日の属する年度の初日から当該年度の末日までの間		
接種間隔		2回目	3回目
	2価	1ヵ月以上の間隔を置く	第1回目の注射から5ヵ月以上、かつ第2回目の注射から2ヵ月半以上の間隔を置く
	4価		第2回目の注射から3ヵ月以上の間隔を置く

副反応について

副反応としては、疼痛、発赤及び膨張などの局所反応と、軽度の発熱、倦怠感などの全身反応がありますが、その多くは一過性で回復しています。

また副反応には入りませんが、予防接種後に血管神経迷走反射として失神があらわれることがあるので、転倒などを防止するため、接種後30分程度、なるべく立ち上がりず、被接種者の状態を観察する必要があります。

医療機関から副反応疑い例として報告されたうちの重篤症例の発生頻度は、2価ワクチン（サーバリックス）は0.0079%、4価ワクチン（ガーダシル）は0.0088%です。

裏面もごらんください

キャッチアップ接種について

平成 25（2013）年 6 月 14 日に開催された厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会、薬事・食品衛生審議会医薬品等安全対策調査会（合同開催）において、「ワクチンとの因果関係を否定できない持続的な疼痛等が、HPV ワクチンの接種後にみられたことから、この副反応の発生頻度などがより明らかになり、国民に適切な情報提供ができるまでの間、定期接種を積極的に勧奨すべきではない」とされ、厚生労働省により積極的な接種勧奨の一時差し控えが決定されました。その後、令和 3（2021）年 11 月、同会議で HPV ワクチンの有効性及び安全性に関する評価、HPV ワクチン接種後に生じた症状への対応、HPV ワクチンの有効性及び安全性に関する評価、HPV ワクチン接種後に生じた症状への対応、HPV ワクチンについての情報提供の取組等について継続的に議論が行われ、安全性について特段の懸念が認められないことが確認され、接種による有効性が副反応のリスクを明らかに上回ることが認められました。そして令和 3（2021）年 11 月、「積極的勧奨の差し控え」を終了すると通知が出され、積極的勧奨の差し控えにより接種機会を逃した方に対する対応として時限的に、従来の定期接種の対象年齢を超えて接種を行うこととする通知が出されました。

積極的勧奨の差し控えにより接種機会を逃した方に対して、公平な接種機会を確保する観点から、下記の通り、従来の定期接種の対象年齢を超えて接種を行います。

キャッチアップの対象	積極的な勧奨を差し控えている間に定期接種の対象であった平成 9 年度生まれからへいせい 17 年度生まれまでの女子
対象期間	令和 4 年（2022）年 4 月から令和 7 年（2025）年 3 月までの 3 年間

定期予防接種お問い合わせ先：竹富町役場健康づくり課 TEL：0980-82-7519（直通）